



同志社

歴史散歩

大津

中村健蔵

大津の今昔

琵琶湖上の春まさに暮れんとする時、近江の人と共に惜しんだ芭蕉の句に、
行く春を近江の人と惜しみける

があるが、その句の首都大津は人口十万を有し、昔、天智天皇の大津京に始まり、その後、「百艘船」の特権（湖上支配権）をもつ北国米の陸揚港、京極氏の城下町、近世では東海道五十三次の宿駅、米相場がたち、小大阪といわれる商業の中心地（この相場商人が寄進して曳山を購入、町を巡行し、大津市の一大景観となつている「カット参照」といわれた。政治・商業・文化の中心は旧大津で、新しく城下町の膳所（せせら）の住宅地を加え、さらに工業地域（東レ、新日本電気の工場）も合併した。市内には瀬田川の溪流に臨む石山寺、芭蕉の幻住庵、木曾義仲・芭蕉の墓がある義仲寺、日吉神社、雄琴ラジウム鉱泉など名所旧跡が多く、歴史上は、有名な大津事件があつた。これは一八九一年ロシアの皇太子が大津市を通過中、巡查津田三蔵がきりつけ、時の大審院長児島惟謙は、法律に条文がないので、無期徒刑を宣して、司法権の独立を守つた事件である。このような過去の歴史を背後に持つ

た大津は、その後、飛躍的に発展を遂げた。

大津と同志社人

同志社人の活躍は、教会を中心として語らねばならない。毎日曜の朝夕、讃美歌のチャイムが鳴り響いてくる。これは大津教会からである。この牧者は、中村利雄牧師で、信徒二百五十名を持ち、教勢益々盛んである。彼は、文才豊かで、毎週発行の『福音週報』の一文を披露すると、『庭さきの沈丁花があのであまつたうい芳香をあたりに発散させて、私共を喜ばせていましたが、この二、三日の雨で見ると、情けない姿になつてしまいました。まことに「につくい雨！」でした。しかし、この情けない姿の中からすでに光沢のある緑の新芽が顔を出し始めています。このかん木の中に宿しているのちは折角咲いていた花を雨や嵐で台なしにされましたが、次ぎなるものの姿勢をちゃんと整えているのです。私はやがて勢いよく萌えいである新緑のすがすがしさに心が洗われるその日の喜びを想像するとき、この「につくい雨」のあし音がさほど気にならなくなりました……」この文には信仰の忍耐と、一歩でも前進したい沈丁花の生命のたくましさを感じとる。

昔、白玉町に大津基督教会有り、その信者に、大正の末期に膳所中学の教諭であつた南石福次郎氏がおられた。同氏は八十歳を越され、友人に「私も名実共に八十(耶蘇)になりました」と語つたをうで、当時、馬場基督教青年会でバイブルクラスの通訳(五月七日に昇天したヴォーリズ、ウォーターハウス両氏担当)の勞をとり、大正十年頃、恩給附近に、同志社予科教授となつた。平賀徳三牧師を助け、大丸で英語教授をして教会に多額の献金をされたようだ。同教会の無牧の時代には、京都より牧野虎次、木村清松、中村栄助の諸氏が応援、昭和三年に工費三万円を投じて大津同胞教会が設立、昭和九年に現在の中村牧師が草津より來住、教会の事業として英語学校が開設、当時、師範学校教諭の中村實女子大教授が授業を担当、終戦後、三井寺下のニップ宅にてハツラー、トーマー、ゲリソン宣教師によるバイブルクラスが開かれ、筆者も通訳の勞を執り、聴講者の中に文学部の秋山健君、北垣景子夫人がいた。

在は夢の浮橋といわれる橋長一三五〇米の大事業を着工、総工費十數億、名勝琵琶湖を橋で二分されようとし、また、湖水の水をパイプで京阪神へ送水の計画、工場誘致など数々の大事業に着手している。珍らしい人物としては、大津絵の収集家として有名な片桐修三氏(昭和三年、大英卒)で、永く大津市役所に勤め、現滋賀県図書館員として、かたわら民芸に長じ、大津絵を集めている。これは元禄時代に盛んな民芸品で、藤娘、鬼の念仏など、胡粉と泥絵具で戲画法で画いたもので、彼は古今の大津絵を集めて、かつて展覧会も開いた。

実業界では遊覧専門の琵琶湖汽船会社々々黒川寛一氏(大正十四年、大法卒)が目立ち、最近、スパー・マーケットの大津進出の第一歩として、「田中駒」の名の下に堂々たる一大建物を建設した田中敬一郎氏(昭和十九年、大法卒)を見逃してはならぬ。大津近在の客を集め、門前市をなすの繁栄ぶりである。学界では、人材に乏しいが、日本経済史専門の松好貞夫(大正十四年、大経)、永く朝鮮銀行に勤務、終戦後皇下の銀行に勤め「相互銀行経営論」を著述出版した柴原正一氏(大正十年、大法卒)、滋賀大学には前に勝田孝興氏、現在、広田清氏がいる。また、大津市史に深い関係のある人は、市史三巻を執筆した文学部の秋山国三氏で、同氏は昭和十五年までを執筆した。美学の園頼三氏も膳所中学出身である。昔、大津より通学していた人に、前女子大学長加藤謙爾氏、前大阪市大教授の磯川治一氏の名前が浮かんでくる。

感慨無量

昔、十返舎一九が「大津の町を打過ぎたるに、湖水の漫々として八景一目に見え渡る景色誠に言語には述べ難し」と書いているが、現在の天津は逢坂山のトンネルを出ると間もなく大津駅で、遠く琵琶の水が朝日に映えてきらきらしている。目を山手に向けると、ずらりと並んだ文化住宅、その向うに一条の線が瀬田に延びているのが、名物となつた名神高速自動車道路で、その幾何学的風景は、昔と趣を異にしている。重なり合う山々や、新緑などいい調和であるが、近年、美しい山々は、醜体を山肌さらし、靈峰比叡の変貌を見るにつけ、昔の自然のままの姿を賞味した者にとって残念でならないのは、筆者のみであろうか。

(経済学部教授・経済英語)